



上 右から、直径90cmのちゃぶ台。/ちゃぶ台裏面。一枚の羽板が脚をしっかりと固定します。/ホソ穴を掘るケンさん。ホソ穴をあけるドリルは刃とドリルの2重構造。きれいな四角い穴があきました。  
左/東京都青梅市のパン屋さん『グルースゴット』の陳列棚もケンさんの作品です。



昭和初期、日本の一家団欒の中心にあっただろうもの、ちゃぶ台。暮らしが西欧化する中で段々と姿を消していったちゃぶ台ですが、脚を折り畳めばちょっとした隙間に収納でき、簡単に他の部屋に移動もでき、とても機能的。佐藤健一さん（以下ケンさん）はそのちゃぶ台を看板商品とする家具職人です。タモ材で作られたちゃぶ台はとても端正。柿渋と弁柄、カシュー漆を丁寧に塗って仕上げられ、鈍い艶と渋い風合いで、使い込んでいくと一層味が出てきそうです。脚の折り畳み部分には独自の技術を取り入れてあり、脚を畳んだ時も開いた時もしっかり脚が固定されます。ケンさんは大学で機械工学を学び、機械設計の仕事をやさっていました。3年程勤務した頃、

設計から制作、製品の納品まで全ての行程を自分でやりたいと思い、退職。その後1年間、職業訓練学校で木工を学び、木工所に就職します。が、4ヶ月で退職。「生意気だったんだよねー。」とケンさんは言います。「毎日同じことやらされてって。機械さわらせて貰えるだけでもいい方なのに、その時はそんなこと考えもしなかった。おかげで遠回りしたよ。最近やっと追いついたって思えるようになった。」退職後、木工で独立するためのお金を貯めるため、再び機械設計の仕事へ戻ります。目標を見つけて機械設計の仕事に打ち込んだ5年間は楽しかった、と振り返ります。ここ奥多摩に工房を開いて5年目。木工は都会ではやりにくいと考える、工房を開く場所を全国的に探していたと言います。そんな時、カヌーでしばしば来ていた奥多摩で知人に相談したところ、家を探してくれたそうです。「奥多摩は都会と、近くも遠くもなくちょうどいい。友達もちょっと時間がある時に、気軽に気分転換がてら遊びに来てくれるから、本当にここで正解だったと思う。」と言います。



#### 家具作家・革布小物作家 佐藤健一さん・恵美子さん

そして、ケンさんのパートナーである佐藤恵美子さん（以下エミさん）は革や布でバッグや財布、雑貨を制作していらっしゃいます。エミさんの鍋つかみはスエード貼りで、そこらの鍋つかみとはひと味違う！見た目のオシャレさに負けるとも劣らない頑丈さと耐熱性でキッチンでの作業を盛り上げてくれます。昔からものを作ることが好きだったエミさんは、大学では金属工芸を学びました。卒業してテレビ局の大道具スタッフや舞台美術スタッフなどを経て、浅草橋にあるバックメーカーに入社。ここで3年半程、生産管理をしていました。ここでの仕事は現在制作をしていく上でとても役に立っているそう。仕事を辞めてから、脳性麻痺の方用に作るイスの座面カバーの制作を始めました。そのイスはひとつひとつ形が違うので、依頼されるたびに型紙を立体的に制作したと言います。そして妊娠を機に、自



上/ケンさん(左)とエミさん(右)。エミさんに抱っこされているのは長男の泰造くん。  
左/エミさんの鍋つかみ。見た目もよく機能性も抜群！な鍋つかみはそうありません。手首の部分は手が入れやすいよう、斜めにカットされています。

エミケンHPでは、お二人の他の作品たちや近況などを見ることができます。  
[www.emiken.com](http://www.emiken.com)

分の作品を制作することに。ケンさんと一緒に工房を見つけている時、「あまり遠くだと友人にも会えなくなるし、実家から遠く離れてしまうのな…」と思っていたそうです。「奥多摩くらいなら大丈夫かな。」ということで、ケンさんとエミさんはやってきたのでした。5月8日～13日には吉祥寺のにじ画廊での個展も控え、さらに今年(2008年)は自宅でもある工房の通りに面した階を、二人のショールーム兼お店にする予定です。「オープン予定は海の日!」とケンさんは意気込んでいます。エミさんのお腹の中には二人目の赤ちゃんが。お店が出来る頃には家族4人、ちゃぶ台囲んでご飯、なんですね。ケンお父さん、がんばってください!